

フドウガハ 不動川 鹿島郡佐々波と下佐々波との間を流れる川。能登誌に、この川の石を拾へば腹中を煩ふと傳へると記する。

フドウザカ 不動坂 能美郡河原山に在る。享保録に、河原山關所の此方に、面に兩足の跡ある赤い石がある。それを不動の足跡だといひ、その地を不動坂と稱すると記する。

フドウザカ 不動坂 白山砂防新道中にある峻坂で、崩壊した砂礫の間を通ずるものである。標高は一六五〇米。

フドウサキ 不動崎 鳳至郡曾良にある海岸。岬。

フドウジ 不動寺 河北郡五ヶ庄に屬する部落。

フドウジ 不動寺 珠洲郡不動寺(部落名)に在つて、眞言宗に屬する。醫王山と號し、木郎寺の衆徒の一であつた。能登名跡志に、『此村に醫王山不動寺といふ密寺あり。云々。其比は天台宗にて七堂伽藍、木郎一郷に寺領ありて、高倉院の勅願所にして、數度の勅旨・繪旨・院宣有つて、坂本山王廿一社を移して、本尊藥師如來は行基菩薩の作、一刀三禮の佛也。三崎權現毎年御幸あり、繁榮成りし御寺なりしに、其比は衆徒多く、今木郎七ヶ寺は末寺にして、皆醫王山と號す也。』とある。この記事によれば不動寺が木郎寺の本坊であつた如くに見えるが、それは誤であらう。寺藏木造藥師如來座像体高四八寸は室町時代の作と認められ、能登作佛藥師中の一として數へられたもの、その他絹本着色佛涅槃像は室町末期乃至江戸時代初期と認められる。又當寺に法華經八卷の寫經があり、その第一卷の奥書には『承應三甲午曆五月廿二日寫寫畢。筆者

空照覺俊坊十之之歳也。』第四卷には『明暦元乙未年十月廿日竟日究夜急々書寫了。十之之歳也。爲乃至法界平等苦脫也。法主空照敬白。』と記されるが、第二卷に明暦元乙未年如月十八日、第六卷に明暦元乙未年正月廿三日とあつて、改元前既に明暦の年號を冠するのは疑はしい。奥書と經文とは同筆である。

フドウジマ 不動島 能美郡苗代郷に屬する部落。郷村名義抄に、往昔は島であり、大洪水の際不動尊が流れ寄つたから島名を得たとあるのは、地名傳説に過ぎぬ。加賀志微には、大領村の附近であるから不動尊の在つた所であらうとしてゐる。

フドウジャクシ 不動寺藥師 ↓フドウジ 不動寺(珠洲)。

フドウダキ 不動瀧 能美郡白山の中に在る。高さ二一米。地圖に布引瀧と記したものは、不動瀧を誤つたのである。その水山姥谷に出で、龍川となり、不動瀧を作り、下流は柳谷川となる。

フドウダキ 不動瀧 鹿島郡佐々波に在る。瀧の傍に小祠があつて、不動尊を安置する。

フドウダキ 不動瀧 石川郡板尾の山中で、横谷川の中流に懸る。直下六〇米餘。快晴の時は日光之に映じて甚だ美。里人之を稱してお瀧の御來迎と言つて居る。加越能舊跡緒に、『板尾領持山の内に、横谷と云瀧とてあり。此瀧古へ獅子のかたちあらはれ申事有と申傳。』と記する。

フドウダキ 不動瀧 羽咋郡一宮と瀧との間にある高さ四米許の瀧。瀧村の名は之に因つて起つたともいふが、その古名が竹津であるといふから、必ずしも信じられぬ。

フドウダキ 不動瀧 鹿島郡井田内なる三尾山の北麓に懸る。直下一八米、瀧壺に近く不動堂あるが故に名づける。一に熊野瀧ともいふ。

ブドウチシヨワタクシコカガミ 武道致知書私小鏡 一册。一名萬咄書。天文・弘治・天正頃の戰爭を叙するもの。其の中に温井景隆・三宅長盛の能州に侵入したこと、加州山内一揆が能美郡別宮城主吉原次郎兵衛を襲つて陥落せしめたこと等、他の軍記に漏らしたことが多く見える。

フトジンジャ 布戸神社 鳳至郡徳成に在る。式内等舊社記に『布戸神社。町野郷徳成村鎮座。稱「布戸明神」。祭神天太玉命。舊社也。』と記する。

フナカクシノイハヤ 船隠窟 鳳至郡大川の西、白崎の北端に面する入口高さ三米餘、奥行三六米の洞穴をいふ。能登名跡志に、『大川村。海へ指出たる山の様に大きな岩窟あり。所の者義經の船隠しといふ。此洞穴入口幅十間餘、水深さ二十餘尋あり。』とある。

フナカクシノイハヤ 船隠窟 珠洲郡寺家小字鹽津のうち大泊の磯邊に在る。能登名跡志に、『船かくしは七八十間四方もある洞也。船を十間計入るれば、一段高くて、内に色々間取有て、人住で煮焼せし跡あり。又左の方に七間計四方の口の横穴あり。』とある。

フナカクシノイハヤ 船隠の間 鳳至郡宇津と山一つ隔てた田ノ浦のうちの入江を舟隠しの間と名づける。能登誌に柵木城跡のことをいふて、『此城山の東平に船隠しとて、不思議成處あり。船何艘泊り居ても外より見ゆることなし。』とある。

フナカタマツリ 船方祭 石川郡美川に行はれる一月十日の祭事で、豊饗祭とも奉饗祭ともいひ、明治二十年頃から初つた。この日帆前船型のものを樟天王の如くに擔ひ、町内を一巡して藤塚神社に奉納する。

フナギダニタウゲ 船木谷峠 鳳至郡澁田から川西に向かふ間の峠。

フナキテツト 舟喜鐵外 諱は馬好。もと大橋氏、舟木源隨の子養する所となつた。父源隨本多氏に仕へて、祿八十五石受け、文久二年鐵外はその嗣子を以て中小姓に出仕し、別に粟米十俵を給せられた。人と爲り重厚にして膽略あり、讀書を好み、刀槍を善くした。明治四年十一月廿三日同志と共に、故主本多政均の仇菅野輔吉を討ち、五年十一月四日自裁を命ぜられた。享年三十二。

フナゴヤ 船小屋 ↓ミヤノコシオフナゴヤ 宮腰御船小屋。

フナツ 舟津 能美郡苗代郷に屬し、無家の地であつたが、明治八年十月北淺井に合併した。

フナテアシガル 船手足輕 前田利家の代に、天野岡右衛門が百七十石を賜はり、御船手方を勤めたといふのがその起原で、同時に御船手足輕もあつたものと思はれる。その後前田綱紀は寛文十一年舟數變を石川郡宮腰に繋ぎ、延寶六年江戸に於いて歌頭三人を召抱へ、切米二十五俵の外金五枚充、平水手七十人外小頭三人は二人扶持の外銀百六十目、隔年給一・帷子一を賜はり、その邸地を金澤三社町に與へられた。後世は員數凡べて五十人、内二人が横目役で歌頭を兼ねてゐたが、藩政末期に之を廢した。

フナカタマツリ 船方祭 石川郡美川に行はれる一月十日の祭事で、豊饗祭とも奉饗祭ともいひ、明治二十年頃から初つた。この日帆前船型のものを樟天王の如くに擔ひ、町内を一巡して藤塚神社に奉納する。